平成３０年度　第２回栗東市市民参画等推進委員会議事録

●日　時　　平成３１年3月１４日（木）１０：００～１２：００
●場　所　　栗東市役所３階　談話室
●出席者　　新川委員長、寺井副委員長、笠井委員、西川委員、池田委員、
　　幡委員、山崎委員、奥村委員、髙宮委員、鈎委員
　　野村市長
　　自治振興課：部長 仁科、課長 木村、係長 松本、主幹 島田
●欠席者　　竹林委員

●議事記録（概要）

１．開会　　進行：自治振興課長　木村

２．市民憲章唱和

３．あいさつ　　新川委員長　　市長

　栗東市市民参画等推進委員会の公開について

４．報告事項　　進行：新川委員長

〇平成３０年度実施事業について・・・資料１
　栗東市市民社会貢献活動促進基金補助金（元気創造まちづくり事業）
　資料説明：事務局 島田
　・実施団体３団体と辞退団体１団体の活動概要および地振協コース終了後フォロー助金交付団体２団体の活動概要を説明
　総評：栗東市市民社会貢献活動促進基金補助金運営委員会審査委員長
　・事業全体の概要や課題などを3月１０日の成果報告会の内容から報告

（審査委員長）一昨年までは、各団体が持ち時間発表し、審査員からの質疑に答えるプレゼンテーション方式をとっていたが、交流が生まれにくいこともあり、昨年度から、各団体が活動内容をまとめたものを展示し、一定の時間の中でお互いに交流しながら自由に見られるポスターセッション方式で実施している。今年度は、採択団体４団体のうち、助成金を辞退された１団体を除く３団体が報告会に参加された。ポスターセッションによる報告会も２年目ということで、いずれも継続事業であることから、展示の準備は全く問題なく、写真や図、あるいは活動で作られた作品を展示するなど、大変魅力的に自分たちの活動を報告されていた。また、３団体の参加だったにも関わらず当日は２０人を超える参加者があり、大変賑やかに実施することができた。昨年

度の報告会を通じて既に各団体の間で連携が生まれていたが、今回の報告会を機に新たな連携も生まれ、ポスターセッション方式にした意義が表れている。また今回、司会を務めた自治振興課長が、冒頭でご自分の自己紹介をされたときに自然と会場から拍手が出たことが大変印象深かった。一般に、司会の方に拍手をするというのはあまりないことなので、行政、市民関係なく誰でも応援しようという姿勢、みんなが仲間という意識の醸成ができているのかなと心強く感じている。成果報告書が出ていない段階での報告会だったので、予算の使い方が適切であったか等については説明できないが、事務局のほうでしっかり見ていただくことになると思う。また、来年度継続して助成を受けるのは１団体のみとなっており、他に新規で助成を受ける団体はいるが、小数の団体で、このポスターセッション方式がどこまでうまくいくのか、次年度に審査委員のみなさまで考えていただく必要がある。

（委員長）事務局より栗東市市民社会貢献活動促進基金補助金（元気創造まちづくり事業）について説明いただいた。また、報告会の様子について、審査委員長から紹介いただいた。数は少ないが、とても活発に活動していただいている様子に、今後にうまく結びついていくといいなと感じながら聞いていた。各委員からもご質問、ご意見、あるいは追加して「こんなこともあったよ」というようなことがあれば、お願いする。

（委員）審査委員長からも紹介いただいたとおり、本当に前向きで雰囲気がよく、温かい雰囲気だった。これまでのプレゼンテーションでは、発表されるみなさんも、とにかく用意してきたことを全部言わなければと緊張されていて、他の団体を応援する余裕までは感じられなかった。ポスターセッション方式になって２年目だが、どれだけ良い雰囲気を醸し出すのか、去年にも増して感じることができた。審査委員長と同じく、挨拶で「司会です」と自己紹介された時にみなさんが拍手をされたのが印象的で、長く審査委員をしてきて初めての現象だったので驚いたが、ぜひ次年度も引き継がれるといいなと感じた。

（委員長）雰囲気がよく伝わってきた。市民同士の仲間意識、連帯感が生まれているなということで、なんとかこういう場を今後に向けても広げていけたらいいなと改めて思った。

（委員）事務局からも委員からも出た「数が少ない」という言葉について。しっかり予算の枠も確保していただいているので、みなさんに活動資金として使っていただきたいという思いはもちろんあるが、評価の視点としては数が多ければいいというわけでもない。それぞれの団体が、助成事業を契機にどのように自分たちの活動を発展させ、また新たな展開していくのか、その部分の評価をしっかり伝えていかないと、「元気創造まちづくり助成の制度って最近うまくいってないんじゃないの？」となってしまう。どうやって伝えていけばよいのかわからないが、うまくいってないと思われないような発信をしていかないと。事務局の人も数が少ないとか、もう言わなくてもいいのではないかと思っている。

（委員長）数が問題というよりは寧ろ、元気創造まちづくり助成という仕組みがきちんと働いている、そういった仕組みがあるということへの価値を評価すべきということだと思う。ぜひ、そういう心構えで。数が多いほうが活気も出るので、努力するのは大切だが、だからといって数が少ないからこの仕組みの値打ちがないということでは決してない。そのことを皆が肝に銘じ、取り組んでいけたらよいと思う。

（委員）多少数がないと、ポスターセッション方式を続けていくのは難しいと思う。何年か助成金無しで継続活動した団体が、また再申請できるといったような制度にはならないのか。観光ボランティアをしているが、元気創造まちづくり事業助成のおかげで、良い活動ができている。しかし、３年で終了だと資金が続かなくなる。資金を集める方法もないので活動も続いていかない。でも、努力した結果として、助成終了後も何年間か活動を続けた団体は再申請が可能なようにしたら、やる気のある団体は持続的に続けられる制度になるのではないか。成果報告会はすごく良い雰囲気だし、この雰囲気を続けるためにも多少数は必要という気がする。

（委員長）同じ団体で同じ活動に助成ということにはならないと思うが、事業の中身であるとか、次のステップに進めるようなものを作っていただいて、その事業に助成を出していくというような仕組みができてくると、元気創造まちづくり事業をさらに発展させるという意味でもこの仕組みが生きてくるのではないかと思う。ぜひ、その方向で考えていただければ。

○栗東市市民参画と協働によるまちづくり推進条例行動計画における各課取組み実績について

資料説明：事務局　島田

※市政への市民参画機会の推進について、市民アンケートが実施できなかったと記載しているが、これは同アンケートを総合計画アンケートに併せて実施したため、市からの情報をどこから得ているかなどいくつか設問が抜け落ちてしまったもので、アンケート自体は実施できている旨、補足説明した。

（委員長）各種アンケートの調査結果、庁内での協働等に関する調査をされているが、事務局から何か資料に対する補足があれば。

（事務局）市民アンケートについては総合計画と併せて実施しており、集計、分析をコンサルさんにお願いした。自分で分析していないのでざっと目を通した印象になるが、２年前にアンケートを実施した時は、ボランティアまつり等に参加されている方にアンケートに協力してもらう形で実施しており、調査結果も協働に対する意識が高いという結果が出たが、広く市民の方を対象にアンケートを実施すると「現実的な数値」になるのだと納得の結果であった。また、自由記述を拝見する中で、自然が多いところが栗東のよさと回答されている方が非常に多く目に留まったので、自然を切り口にしたまちづくりが出来たらいいなと感じた。

（事務局）総合計画の市民アンケートの中の一項目として、政策実現に向けてという項目があるが、「市政への市民参画や市民と行政との協働によるまちづくりが推進されている」と感じる市民の割合は、平成２６年度の実績は３９％、翌２年後の２９年度も同じく３９％だったものが、平成３０年度においては、これが４０．８パーセントと微小ではあるが、増えている。市民の意識の中には、協働のまちづくりが進んできているというかすかな思いがあり、それが結果として顕れたのかなと解釈している。

（事務局）事業所について、分析している中で「業績が出てきてゆとりができると社会貢献ができる」といった空気を強く感じた。２年前に実施した際は、自由記述が多く、嬉しい驚きがあったが、今回は少なく少し寂しく感じた。

（事務局）職員研修について、今年度は課長補佐、係長、主幹級を対象に実施した。結果としては大変良いが２３％、良いが５３％、普通が２２％で、悪い、大変悪いという回答はなく、どの職員も協働の必要性を感じていることが分かった。現状では年一度しか職員研修ができておらず、それが協働のまちづくりに結びついていかない要因のひとつになっているのかなと感じている。研修を重ねていくことで、より協働への気運も高まると思うので、次年度以降検討したい。

（事務局）チラシのつくり方については、内容が興味を惹く内容だったこともあり、たくさんの申し込みがあった。また、職員も参加できる研修としており、各団体から提出いただいたチラシをみながら気づいたことを言い合ったりする中で、市民との交流が生まれたのではないかと感じている。次年度の研修であるが、アンケートで実施して欲しい研修分野を尋ねたところ、ボランティア養成が２５％、組織づくりが３０％、広報が４０％であった。今年度は広報づくり研修のみであったが、アンケート結果を参考に、次年度は２回くらい開催できればと思っている。

（委員長）報告いただいた件について、各委員からご意見、ご提案などよろしくお願いしたい。

（委員）各課からの取り組みについて報告いただいたが、全体的に課題提起をしているところが多かったように思う。県政モニターをやっているが、栗東市でも何年かに一度、市民の意見を聞く機会を設けてみてはどうか。例えば、県政モニターでは、募集をかけ手を挙げてもらった人たちに、恒常的にアンケートを実施されている。具体的には、県が抱えるたくさんの課題から毎回テーマを絞って調査票が作成され、数ヶ月に一度送られてくる。市も同じようにモニターを募集し、意見を聞くなどの手段を取ることで、きめ細かく市民のニーズを把握することはできないか。モニターに手を挙げる人は、元々参画意識が高いので、有益な意見が得られると思う。維持するのは大変であろうし、モニターの意見がすべてとも言わないが是非検討いただきたい。今回、無作為にお願いされたアンケートでも、３０％の方が回答されている。モニターを募集すれば何らかの反応があるのではないか。広報を通じて募集すればモニターに手を挙げ

る人も出てこようかと思うし、課題解決のヒントも得られるかもしれない。ぜひ検討いただきたい。

（委員長）市政モニターについて、事務局のほうでそういった取組みをされているのかお聞かせ願いたい。

（市民政策部長）市政施行前のことであるが、一時、町政モニターということで取り組みをしていた時期があった。いつの間にか立ち消えていたが、公聴ということで、定期的に市民のみなさまから意見を聞かせていただく機会も重要であろうし、内容など検討したい。また、まちづくり等の施策や取り組みがどれだけ進捗がはかっているのか把握するために、二年に一度のスパンで市民の方々に対しアンケートも実施している。定期的に市民の声を聞かせていただく機会として、今後も続けていく。一方で、委員がおっしゃるように、同じ方に様々なご意見を頂戴する県政モニターといった視点も大事なことであろうかと思う。一度検討したい。

（委員長）よろしくお願いしたい。

（委員）私も子育てサポートのボランティアグループを立ち上げてやっているが、メンバーが７０歳を超えるようになってきた。そうすると、子守りできるメンバーが限られてくるようになってきた。体力がついていけず、辞めないといけないかなと感じている。市で実施されている発達障がいの子を対象にした事業でも、子育てサポーターとして入っており、今年一年はなんとか頑張っていこうとやっているが、体力的に厳しい状況になってきた。若い人がどうしたら積極的に参加してもらえるのか、もう少し考えていかないと、このままでは行き詰ると感じている。続けていきたいが体力が厳しい。２時間から２時間半ほど子守をするが、その間ずっと子どもが泣く。このごろの子どもはお母さんが好きだから他の人だとダメという子が多く、２時間泣きつづけられると虐待しているような気持ちになる。おんぶしても乳母車に乗せても遊んでも泣く。そういうのを考えると高齢になってくると精神的にも体力的にも辛くなってくる。どうやったら若い子が参加してくれるのが自分たちも工夫して考えていこうと思っているが、市でも、そういう活動をしてくれる人をどうやって増やしていくのかもう一回、改めて考えていかないと。協働参画している人は、きっと自分たちと同じ年代の人が多いと思う。若い人たちに、どうやって裾野を広げていくのか一番大きな課題として考えていただきたい。

（事務局）特にボランティア団体、育成については、社会福祉協議会のボランティア市民活動センターのほうで共にどういうことができるか話し合っているが、どのボランティア団体でも、ボランティアさんの高齢化、次の方に入っていただく手法というのは行き詰っている状況だと聞いている。そこを何とか突破しないといけないということはセンターとしても課題に挙げていただいているので、今のお話も含めて今後考えていきたい。

（委員）どの団体も苦労している。地域の活動団体でも新規メンバーが入ってこなくて苦労されているという声は多く聞かれる。ちょっと考えていかないといけない。

（委員）一生懸命考えているが、なかなか課題にあげても前に進まない

（事務局）生涯学習課で青少年向けの事業をしているが、そこに参加してくれた人たちが成人式の企画をしたり、コミセン祭りに参加したり、そういう光景を以前はよく見かけていたように思うが、最近は見かけなくなった。生涯学習課の職員と話す機会が持てたらいいのだが。まちづくりの担い手として活動できる導線が出来たら、きっかけも掴めるのではないかと思ったりもしている。

（事務局）数年前に音楽活動をされているマミーズバンドさんに元気創造まちづくり助成をしたが、その後、栗東市内で活動を続けられ、市内コミセンで練習されたり、地域のイベントに出演されたり活躍いただいている。

（委員）そこの子守りボランティアに入っている。

（事務局）若年のボランティア団体も少しながらも芽は出てきているということで、この元気創造まちづくり事業が足がかりになっているのかなと思う。先ほども報告させていただいたが、新たな活動団体に対しても支援していける形となっているので、継続して取り組んでいくことで団体の育成にも繋がっていくのではないかなと考えている。

（委員）それはかなり成功したなと思っている。０歳のときからみているので、一緒に成長していると感じている。「おばちゃん、今日はちょっと遅かったな」と言い合えるほど仲良しなので、なんとか続けていけるだろうと感じているが、先ほど話した発達障がい児を対象にした市の事業については、半年くらいのサイクルでメンバーが変わるので、泣く子の多さに心身ともついていけなくなっている状態である。若い子は体力があり、泣く子に負けない元気があるので、なんとか入ってもらえるよう、いろいろ挑戦してはいるがなかなかうまくいかない。ちょっと考えないといけないなと。後ろ向きにならないで、できるだけ前向きに頑張っていきたい。

（委員）団体活動ばかりじゃなく、卓球のラージボールを楽しんだり、自然観察の森などに出入りしているが、どこでも一緒。なぜか後進が出てこない。６０代前後の方ばかりで、若い子が集まってこない。疑問的に捉えるのではなく社会現象として考えていかないと、とてもじゃないが解決には至らないと思う。ボランティアだけの問題ではない。ラージボールの世界でも８０歳超えちゃった人が何人いるとか、そういう感じで。でも元気でいられるというのは喜んではいるが。若い人は決して入ってこない。団体に所属するということに対する危機感があるのか、社会現象のひとつとして捉えていかないと、解決の道は見つからないのではないか、という反省というか体験から意見させていただいた。

（事務局）明るい兆しと言いますか、先ほど地振協の活動で補足説明しなかったが、治田東学区で新規で実施されている「地域ささえあい事業」は、地域の方が今の課題はなんだろうということで考えられたのが高齢者の居場所づくりだったが、各自治会においてサロンが少ないのでどうしようということで、まずは学区全体でサロンの意義を学んでいただこうと始められた事業である。そこに参加させていただいたが、お子様連れの保護者の方がかなりたくさんおられ、子どもと高齢者が一緒になってサロンをという形で進められていた。地振協での地道な活動がボランティアに関心を持っていただくきっかけにもなるのだろうなということで報告させていただきたい。

（委員）ボランティアだけではなくて、それ以外の活動も若い人が集まらないのは、どこの団体も同じだと思うが、ボランティアであるとかNPOは自分がやりたい、自分からの意思がないと動けない。ただ、長年しっかりと活動されている団体にはその型ができてしまっているので、若い人が、自らやりたい気持ちになった時や、こんな活動がしたいと思った時に上手くマッチングしないと、既存の団体に入っていきにくい面もあると思う。長年活動されている団体には若い人に入ってもらいたいという気持ちがあると思うが、違う視点で見れば、新しい団体をどんどん生んで育てていくみたいなイメージもあったほうが良いのではないかなと思う。市全体を見た時に、「あちらこちらで頑張っている人がいて良いところだね」と感じられる、そんなまちを目指してもいいのかなと思う。団体毎にしんどい思いはあっても、栗東市として、「いろんな人や団体が活動していて元気だね」と感じられるような形を目指すのも、ひとつの方法ではないか。私たちの団体に入ってくれなくてもいいけれど、子育てのサポートグループをつくって活動するのならアドバイスできることあるよといた風に繋いでいくとか。そういうやり方もあるかなって。

（委員）地域でも高齢化が極端に進んでいて、清掃活動にしてもいろんな事業をやっても担い手と役員のなり手がなく、本当に苦労している状況。３０～４０年前に比べて極端に違うのが、子ども会とか壮年層の担い手が女性ばかりになってしまっている。男性軍が子ども会などのいろんな事業に参加しない。地区別懇談会をPTAで小学校や中学校に集まってやるが男性は来ない。一方で女性の実態を聞いてまわると、３０代の小学校や中学校のお子さんを持つ層は日中勤務されている。委員も言われたように、私たちの年代は貧乏だったが、奥さんが家にいて活動ができる基盤がどこかにあった。今は父も母も勤めている共働きが殆どで、活動できる時間的な余裕が全くない。また、会話そのものがメールだけで交わされるなど、出会って対話する機会がなく、地域活動を共にしていくような付き合いが難しい。地域でいろんなことをやっていても若い世代は顔が出しにくかったり、参加されても喋りにくかったり、情報も殆ど入ってこなかったりする。一方で、地振協で葉山学区の会長をしていたときに役員を対象に実施したアンケートでは、役員になってよかったという回答が半数以上に及んだ。アンケートを実施したのは５部会中、４部会の役員だったが、その中のひとつである青少年育成部会の役員は２５人いて圧倒的に若い人が多いが、役員をなってよかった人は他の部会と同じく半数を超え、地域で話していくなかで、地域の実情がやっと分かったという意見もいただいた。出来る場所や、やれる役割があれば若い人でも動いてく

れる。地域の実情を伝え、情報を得る。それが結果的に、これから長い年月暮らしていく土地で、人と人との付き合いができたり、喋る場所ができたりといったことに繋がっていくように思う。年寄りと言ってはいけないが、私たち地域の先輩が、顔を見て喋れる場所や機会を地域でつくると、若い人たちも来てくれる気がする。市でも広報やホームページなど情報を伝える手段はあると思うが、職員が自らいろんな事業に出て行き、直接サポート活動をされている人と話して、触れ合う機会を作る。積極的に市民と話す、また話ができる場所を作る。それが後継者を育てていく機会に繋がっていくと思う。

（委員）企業誘致に関わる部分で要望的なことになるが、現在、都市計画課で第４次都市計画マスタープランを策定しておられるが、地域別に懇談会をされ、様々な意見を聞いていただいている。そんな中、先日の新聞報道でも栗東に大型商業施設が進出するという記事が出ていた。農業振興地域への大型商業施設進出ということで、大きくまちが変わるのではないかと思っている。以前、新幹線新駅の話があった時も、行政の支援をいただきながら地域ぐるみでまちづくりを進めてきた。残念ながら新駅設置は中止となったが、駅や大型商業施設の進出で大きく地域が変わることもある。そういった時に、学区などの大きなコミュニティでは「まちづくり協議会」が設営され、商業関係や農業振興など検討されていくが、コミュニティの最小単位である地域や自治会にも目を向けていただき、住民自らがまちづくりを考えていけるような機会を作っていただくとともに、支援をお願いしたい。

（市民政策部長）今、商業施設の立地促進ということで市長が三期目の公約に挙げている。ご指摘いただいたように当該地域については市外地調整地域だけでなく農業振興地域でもある。まずは、国、県との調整が必要だろうということで、立地の可能性を担当課で探っている。また、都市計画マスタープランにおいては、市民のみなさま方からご意見を頂戴しているところである。商業施設の進出についても、地域のみなさまのご意見も頂戴しながら進めているという状況である。当該小学校区域において、先日、自治連合会があったが、現状においても道路が渋滞していると伺っている。できるだけ影響が出ないよう対応をしつつ、立地促進を図っていくといったような極めて難しい課題である。渋滞問題のほかにも農業振興など、いくつか大きな課題もあるほか、当該エリアは守山市、草津市と隣接している地域でもあるので、両市の市民の方々からのご意見、要望も様々な形で出てくると思われる。具体的には進んでいない、市民のみなさんの目からはそのような印象を受けると思うが、住民から頂戴したご意見を踏まえ、どういったアイデアをまちづくりとしてやっていくのか可能性は探っていきたい。

（委員）行政主導型の形でまちづくりが進められるのではないか心配される。地域の方々が自ら、まちづくりに関われるようきっかけづくりをお願いしたい。学区自治会長とお話を重ねられていると説明があったが、地域の方々に、どのような形で進めていくのか伝え、自分たちの地域で、どういったまちづくりをしてくのか自ら考え進める。無論、地域で進めるには限界もあるので、超えた部分は行政から支援をいただく、そ

ういった形にしたい。まだ先の話ではあるが。

（市民政策部長）行政だけでは進められないことは十分承知している。常に地域の方のご意見を伺いながら、心に刻んで進んでいきたい。

（委員）生涯学習課で取り組まれている人材バンクについて、どのような分野、内容なのでしょうか。登録されている方で子育ての経験がある方がいたら、お願いするのもひとつの方法かなと思って発言させていただいた。私も随分前に生涯学習課からお願いされて登録した記憶があるが、以降、登録の更新を言われることもなく、チラシ等も見かけないので募集されているのか疑問に思った。

（事務局）登録いただいているのは、主にサークルの活動に対しての講師。「華道ができます」とか「音楽ができます」という風な意味合いで登録いただいている。自主サークル等、地域で誰か教えてくれる人がいないか問合せがあった時に紹介できるシステムになっていると聞いている。学校区毎にコミュニティセンターがあるので、どんな人材がいるのか窓口で周知できるようにしている。それが、今後更新されるのか、また管理については所管課に確認したいので、ご意見いただいたことをバックさせていただく。

（事務局）以前、自治振興課と協働していたｃｏｃｏ愛さんでは、保育士として活躍されていた方が古民家を借りて子育てサロンを運営されている。地域の行事においても「たこせん」を売ったり、バザーをされたりしている。何か良い知恵はないか折にふれ聞いてみたい。

（委員長）今後の市民活動の活発な展開、ボランティアやＮＰＯ等の組織化というようなことを考えていくというときに、現在やっている活動をどのように続けていくのか、工夫も大事だが、もう一方で、新しい団体が飛躍しやすい雰囲気や場をどのように作っていくのか、こちらも大事かもしれない。自治会活動や地域の課題というところに関わって参加いただく、そこからいろんな新しい活動や地域への関心が得られるというようなこともあるかもしれない。行政が様々な場面で積極的に働きかけていくこともできそうだし、既にある様々な活動をみなさんにお知らせするだけでも、刺激を受けられる方もたくさんいるかもしれない。これまではどちらかといえば、元気創造まちづくり事業であるとか、現に活動されている団体をベースにして考えてきたが、これからの市民参画協働を考えた時、潜在的な活動の可能性のある人たちを掘り起こしていく、関心を広げていくように持っていくことも大切である。既存の団体の力も借りながら、行政としてできることも多いと思うので、是非そういった部分も努力していただきたい。さらに、市民の皆さん方も新しい人を巻き込む努力をしていただき、相乗効果、行政と市民双方が高めあえる仕組みや働きかけがあると、よいかもしれない。次年度に向けてしっかり取り組んでいいただきたい。

（委員長）それでは協議事項については以上とさせていただくが、各課取り組みをしっか

りやっていただいているが、いろいろと課題も出てきた。新しい層だけではなく、行政の取り組みも、まだまだこれからやっていただかないといけないところがたくさんあるので次年度しっかり取り組みを進めていただきたい。

（事務局）全体の取り組みの中でも少し触れたが、協働に関する調査ということで全庁的に調査を実施した。本日、報告書をお渡しさせていただいているが、各課から出てきた意見をそのまま掲載している。委員からもお話があった、元気創造まちづくり事業について３年というのはどうか？といった意見であるとか、もう少しフォローをといった意見もいただいているので、そのあたりも鑑みてきちんと仕組みを作る段階にきているのかなと感じているが、提出いただいた分だけいろんな考えがあるので、集約してどういう方向性に持っていくのかについては時間がかかる。例えば元気創造まちづくり事業にしても団体が申請してくるのを待っているだけではなくて、市で課題や意見を吸い上げるような仕組みをつくって、そこからテーマを決めて「こういったテーマで活動してくれる団体はいませんか？」といった募集の方法もあるし、市民の意見を取り入れる仕組みを協働事業提案制度だけでなく、元気創造まちづくり事業でも考えていかないといけないのかなと思っている。すぐには無理なので、これからじっくり考えて、２、３年を目処に新しい仕組みを構築できたらと考えている。

（事務局）補足すると、協働の条例にある行動計画が来年度改定を迎える。次期行動計画を策定していく中で、職員から出てきた意見、今までの実績を踏まえながら見直していく必要がある。委員長からもお話が出たが、そろそろターニングポイントにきているのではないか、新たな考え方をしていく必要があるのでは？といった意見もあるので、そうした中で次の一年間かけて行動計画を作り直したいなと考えている。今までの行動計画を踏襲する形にするのか、しないのか、それも含め、もう一度考え直さないといけない時期に来ているのかなと。特に、協働事業提案制度の事業実施した団体は終了後どうしているの？といった疑問もございましたので、今回調査して報告させていただいた。共催事業もありますし、補助金という形態を取りながら市も提案をし、協働で進めているような形の事業もありますし、全般的に来年度一年かけて考察したい。

（委員）その際は、できるだけ融通の利く制度となるよう考慮願いたい。

（事務局）なかなか審査の中でも意見も厳しいものが出るので、あり方についても見直していかないといけないと感じている。委員からの指摘にもあったように、再度の申請についてどうするのか、そういうところも検討していこうと思っているのでご意見等頂戴したい。

（委員長）よろしくお願いする。ただいま今後に向けての課題ということで、次期行動計画を考えていかないということで事務局から説明いただいた。各委員から今後の取り組みに向けて意見、あるいはご質問等あれば。

（委員）年々若い人の参加が少なくなっているという話があったが、いろんなところに参加して感じるのは、特に同年代の男性の参加が極端に少ないということである。女性の参加は多いが、男性はどこで何をされているのか？といった状態。若い人の掘り起こしもあるが、退職後の男性陣も加えて欲しい。団塊の世代が本当に少ないので。

（事務局）歴史講座なんかに行くと男性だらけ。発掘関係の現地説明会とか行くと、ポケットがたくさんついたベストに一眼レフカメラを首から提げた男性陣がそこかしこで情報交換されている状態。ものすごい熱意で、他のところでも生かせるのではないかと思いながら、どう引っ張って良いのか思案している。

（委員）参加している人は地域の人は少ない。

（委員長）そう、地域以外の方が結構参加されている。

（事務局）観光ボランティアガイド協会さんも圧倒的に男性が多い気がする。

（委員長）観光とか文化の関係は、意外と男性が多い。

（事務局）元気創造まちづくり事業を活用していただいて、来年度が最後となるが新規会員が１０名増えたと聞いているが、男性陣が結構な割合おられる。個人の生活の資質が変わってきたというところと、考え方が変わってきた、嗜好で動かれるという部分が大きいのかなという話は聞いている。

（委員）囲碁、将棋のグループも男性が多いし、そういうところはあるかも。

（委員長）そこはそれぞれの必要性とか関心を上手に捕まえながら、しかしもう一方ではいろんな広がりがありますよと情報を提供していくのが大事かもしれません。このあたりも是非次年度検討いただければと思う。

（委員）補助金について食糧費が認められにくいが、共食が大事で、食べながらいろんなことをするのがすごく大事で、できるだけそういう機会が認められるよう検討いただきたい。

（委員長）食糧費を今後、助成事業の中でどう考えるかという難しい問題ではあるが。

（事務局）現在は、食糧費は調理実習であるとかいう場合は認めているが、事業の時にみんなで一緒に食べるとかいうのは認めていないので、制度を見直す時に検討したい。食べることが目的ではなく、食を通して交流をはかることが目的だと伝わる申請であれば認められるのか、難しいが考えたい。

（委員長）そのあたりを緩める考え方が出てこないと、なかなか使い勝手はよくならない

ので。

（事務局）例えば、高齢者を対象にした事業であれば、よく噛んで食べるとか理由付けもしやすいが。

（委員長）そこを超えないと。人々が集まってそういう活動をしようという意識付けがされていく。そのプロセスが必要というのは実はいろいろある。そういうところが伝わらなければちょっと無理かな。

（委員）団体の人たちは食べていることに、どんな意味があるのか理解しているが、外から「なんだ、助成金でご飯を食べているのか」と横槍が入ってしまう。そういう現状があるから認められない。みんなが、共食がもたらす価値を理解し肯定的になれたら良いが、どうしても人のことを指摘してしまう。市民の意識が変わらないと難しい。

（委員長）そういう市民の声に応えていくところが行政であるし公共性がある。

（委員長）他にご意見は。事務局から何か伝えることはあるか。

（事務局）特にない。

（委員長）今後に向けて、貴重な意見をたくさんいただいた。次年度に向けて検討いただきたい。

１１．閉会

あいさつ　寺井副委員長